

庵崎考

松尾勝郎

建部綾足の宝曆八年（一七八）ごろの筆と思われる『紀行草のいはり』に、「はた隅田川のあたりちかき五百崎に庵イッヅキつくりし浮囊庵といへる庵主は、麦着といひて我無キ人なりし。」との一条がある。当時、浅草金龍山下に吸露庵を結んでいた綾足の下に、五百崎に住む浮囊庵麦着なる俳人が来訪したというのである。

五百崎は通常庵崎と表記され、隅田川から程遠からぬ情趣ある文学空間として、多くの風流人が関心を示し、興趣を覚えていたことは明白であるものの、この地が現今におけるどこに該当するかについては必ずしも明確とは言い難い。そこでこの小論では、まず名所記・地誌の類がどのように考証しているかを検証し、次に庵崎を題材の対象としている俳人の作品を拾い、俳人たちがどのような空間として認識していたかを考察してみたい。

1

寛文二年（一六六二）刊の『江戸名所記』⁽¹⁾は、

七 浅草 金龍山 付真土山
むかしこの山より金龍を掘り出だしけるゆゑに、すなはち金龍山と名づくといへり。聖天宮のやしろあり、大いなる松山なり、いにしへはここを真土山といひし、これ武蔵の国の名所なり。紀州にも同名あるなり。『新勅撰』弁基法師の歌に、

真土山夕くれくれていは崎の角田川原に独りかもねん

と、弁基法師の詠んだ真土山を「紀州にも同名あるなり」と断わりながらも、山上に聖天宮を祀る江戸今戸橋南詰の待乳山に当てている。しかし『万葉集』（巻二）を初出とするこの歌の「真土山」は、同じく巻一、調首淡海の「あさもよし紀人羨しも亦打山行き来と見らむ紀人羨しも」の「亦打山」と同じく、和歌山県橋本市真土、あるいは奈良県宇智郡阪合部村の待乳峠かとされているし、「いは崎」は橋本市隅田に残る地名「角田川河原」は今の紀の川の隅田の河原かといわれ、紀州説が定説化している。つまり弁基法師の歌を根拠とする『江戸名所記』の武蔵説は我田引水にすぎないのであ

る。

しかし享保四年(一七三〇)成、『東都紀行』⁽²⁾の、

扱も太田道灌が、我庵崎と興ぜし旧跡、殊には関屋の里も間ぢ
かけれ共、此所は名所尋るにあらねば、立寄程のいとまもなし。

昔誰此庵崎にすみだ川花時鳥月を詠めて

との記述によれば、庵崎がすでに風雅に親しむ江戸の人士の間に、
武蔵の名所として名を得ていたことになる。関屋の里は『隅田川叢
誌』に「隅田川辺なる村里の総称にて、寺島村より千住河原までを
一円にいえるなり。」とあり、庵崎を関屋と同じく隅田川東岸に位
置する地域としている。

享保十八年(一七三三)成という『本所雨やどり』⁽³⁾には、

爰に待乳山、庵崎、関屋の里と云名所有。又駿河国にも角田
川、待乳山、庵崎、関屋の里と云名所有。同じ名所は国々にあ
れども、此ごとく成はなし。駿河のすみだ川をば、今ははたう
ち川と云。まつ地山をはたうち山と云。源高門^{兵部}の湯の沢の
紀行に見えたり。高門は近來地下の歌人の由申侍。此名所駿河
にてはとりうしなひ、武蔵下総にてはもてはやす。思ふに待乳
山、庵崎は駿河成べし、関屋の里は此所にも有べし。木母寺に
隅田川五十首と云和歌の草紙有。此所の古今の歌を集めたり。

(中略)其歌の巻軸は木母寺前の住侶の歌也。

すみだ川代々に流れし歌人の言の葉そへてうつすおもかけ
此中にも関屋の里の歌はあれ共、蘆崎、真土山の歌は一首も見
えず。此所の名所にて侍らば、庵崎、まつち山を讀し隅田川の

歌もあればいるべきに、一首にても無は、此所の名所にてはな
しと見えたり。関屋の里の歌に、法親王道晃、

かへるさの関屋の里の宿もがなすみだ河原のあかぬ詠に

此歌彼五十首に入たれば、関屋の里の証歌とすべきにや。

とあり、さらに庵崎の名を詠み入れた俊頼朝臣の「庵崎のこぬみの
浜のうつせ貝藻に埋れて幾世経ぬらむ」(続後撰集・卷十七・雑歌
中)や、能善法師の「たのめてもこぬみの浜の沖つ風何庵崎の松に
吹らむ」(新拾遺集・卷十三・恋歌三)は、駿河の庵崎を対象にした
ものとする。「こぬみの浜」は「庵崎」と「磯崎」の相違はあるが、
『万葉集』卷十一の「磐城山直越え来ませ磯崎の許奴美^{ニノメ}の浜にわれ
立ち待たむ」とある、薩埵峠の麓の駿河湾に臨む地名と推察されて
いる。「こぬみの浜」を念頭に置いたと考えられ、この主張は容認す
べきであろう。

『本所雨やどり』の記述は、このころすでに待乳山・庵崎・関屋
の里などが隅田兩岸の名所として認知されていたものの、このう
ち待乳山、庵崎は元來駿河の名所であったものが時代の流れと共に
衰微し、その名を踏襲した新名所が武蔵下総の地に設定されたとな
る。ただし関屋については、「隅田川五十首」の法親王道晃の歌を
証歌とし、古來からの名所であったとしている。

待乳山に關しても、前述の『江戸名所記』では弁基法師の歌を江
戸説の根拠とするのに対し、

名所方角抄の引うた、知海法師

待乳山をろす嵐や寒からん

すみだ河原に千鳥鳴なり

名所小鏡の引歌、弁基法師

待乳山夕越暮て庵崎の

隅田川原に独かもねん

此二つの歌を引いて、方角抄と小鏡に、待乳山を此所の名所也と云。此歌きはめて此所をよみしともきこへず。駿河の待乳山を讀しにや有らん。此辺りには山もなし。世の人聖天の岡を待乳山と云。されども古き歌の書にも、武蔵の待乳山と云事は見えず。八雲御抄にも、大和駿河のまつち山は見えたれども、此国にはなし。

と、『名所方角抄』（寛文六年・二六六刊）、『名所小鏡』（延宝六年・二六六刊）が、知海法師や弁基法師の歌を引歌として江戸の待乳山を詠んだとする誤謬を正している。この筆者の姿勢は「歌の書はあまたにて見る所は少し。猶道有人に尋ぬべし。」と謙虚であり、その見解はきわめて妥当な所論というべきであろう。また「年月の移りかはるにしたがひて、歌枕もしれがたく、たどくしく成行にこそ。（中略）昔だにかくあるを、まして末の世をや。」と、旧跡や歌枕の所在が歳月の流れによって次第に信憑性を減じ、やがて分明ならざるものとなるのを嘆じている。

文化十二年（一八二五）三月以降の刊とされる『武蔵野話』⁽⁴⁾は、『井蛙抄』に載る庵崎の歌三首をいずれも「駿河国の歌とあり。」と注し、次に『万葉』『拾遺』『新古今』『統古今』『新統古今』に載る待乳山の歌計十首を併列し、「右の十首は待乳山の歌にて大和国な

り。」と注記、ついで「駿河・大和両国にも角田川ありてその辺に待乳山庵崎あるゆゑに、今荒川の下、浅草川の上のすみだ河に待乳山庵崎を擬したるなり。」と『本所雨やどり』の説とほぼ同様に、駿河あるいは大和の歌枕を擬して設定した旨を述べている。

初代向島百花園主であった花屋敷庵頭陀菊塙の『墨水遊覧誌』⁽⁵⁾によれば、「やんごとなき御方の御遊覧よりして、みやびなる人、またはまれ人の詩歌連俳、春秋の月花をめでたまへば、すみだ川のすみん、まで、古跡ならざる所も、いまは名所となりぬ。そのひとつ、あげんも、老の物にうとく見る人ゆるしたまへかし。」とあり、文政十一年（一八二〇）のころには隅田の兩岸にさまざまな名所が生まれているのを推察することができる。

天保五年（一八三四）刊の『江戸名所図会』⁽⁶⁾には庵崎についての記載が二箇所みられる。一つは、

庵崎 木母寺の北の方とも、または請地村秋葉権現の辺なりともいへり。澄月『歌枕』に、武蔵国に加へ、『夫木抄』『藻塩草』等に下総国に入れたり。同名駿河にもあり。『紫の一本』といへる冊子に「小梅村の出崎を庵崎と云ふ人あり、これも慥ならず」と云々。また同書に、昔本所の地入海にて、洲崎ことに影しくありしゆゑに、五百崎に作しといふ。されどもいまだ考へず。

『新後拾遺』

我がためはむすびもおかぬ庵崎の隅田河原に宿やからまし

尚長

『新保名所百首』

今宵また誰宿からんいほざきのすみだ河原の秋の月影

順徳院

との記述である。ここでは庵崎の位置を木母寺北方、あるいは請地村秋葉権現周辺と想定しながらも決定的な判断は下していない。おそらく厳密な地域割に依る地名ではなく、通り名のような呼び名であったと思われる。また尚長や順徳院の歌が当地の庵崎を詠じたものでないのは、これまでの用例に照らしても明白である。

もう一つの記述は見開きの挿画上方に、次のごとく挿入されている。

庵崎 俗間請地秋葉権現の辺をしか唱ふれども定ならず。須崎より請地秋葉の近傍までの間、酒肉店多く各貨をかまへ鯉魚を畜ふ。酒客おほくここに宴飲す。中にも葛西太郎といへるは、葛西三郎清重の遠裔なりと云ひ伝ふれども、是非をしらず。むさしやといふは、昔麦飯ばかりを売ったりしかば、麦計と云ふころにて麦斗と唱へたりしも、今はむさしやとのみよびて、麦斗と号せしをしる人まれになりぬ。

この挿画は、いわゆる秋葉道を写したものと思われ、秋葉権現は画面に描かれていないが、松をはじめ枝ぶりの良い樹木を配し、作庭に趣向を凝らした見事な料亭風の建物がいくつも配置され、その周囲には茶屋風の家が散在し、遊客と見てとれる人物の往来で賑わう構図となっている。

文中にいう「葛西太郎」と「むさしや」は、『江戸買物独案内』

(文政七年・二六四刊)に、それぞれ「会席 隅田川葛西太郎御料理平岩」、「向島御料理 麦斗 武蔵屋権三郎」とある。「葛西太郎」は大田南畝、山東京伝など江戸文人たちの愛顧を得た。「むさし屋」は川魚料理で名を売った。

明和・安永・天明期のころから、文人墨客が風流を楽しみ、また庶民の行楽地としても股賑をきわめた庵崎の当時を、矢田挿雲は、五百崎 俗に庵崎と呼びなしたのは、請地町秋葉神社の付近一帯で、明和から天保頃まで、料理屋が繁昌し、池の鯉を料りて供するのが呼び物だった。秋葉神社の神体は、百姓与右衛門が、家伝の木像をもったいなしとして、僧侶葉榮に与え、葉榮は元禄十五年(一七〇〇)当社を起し、十一月十七・十八両日の大祭には、火防の札を出した。参詣人は、火防の札は後まわしにして、門前の料理屋で、鯉の洗いと女中のお世辭を下物に、一杯かたむけると、自分の家が焼けても決して動じなかった。その昔、鯉が遊弋したという大池は、埋まって跡形もなく……

旧記によれば、秋葉神社からいわゆる庵崎の辺は、幽邃閑静で食べものがうまくて、そぞろに行ってみたくなるようなところであったらしい。⁽⁶⁾

天明六年(一七九六)四月二十一日、本所堅川の大工の棟梁で、五代目團十郎と義兄弟の約を結んだ立川駕馬の談洲楼が、武蔵屋権三郎方で「嘶の会」をひらくから、聞きにきてくれという案

内状を、文士仲間が発した。兄弟分の団十郎はもちろん、散文派の大家、大田蜀山人以下、飯盛、真顔、京伝、京山等の狂歌師、戯作者などが会合し、予期以上の盛会となった。焉馬と合作の『五百崎虫の評判』は、当時流行の役者評判記に擬して、庵崎辺にすだく虫の音の月旦しんぎんをしたもので、文筆に対する彼のたしなみが窺われる。⁽⁹⁾

と興味ぶかい話題で庵崎を語っている。

挿雲の筆は『江戸名所図会』に準拠して、庵崎を秋葉権現周辺の一带と想定し、明和・安永・天明の時期から秋葉権現参詣と行楽を兼ねた遊客相手の料亭が繁昌し、その賑わいは天保のころまで持続していたこと、庵崎の繁栄には文人連の寄与が多であり、一つの文化圏ともいえるエリアを形成していたことなど、その特性をよく伝えている。

かくして、当初は漠然とした地名でしかなかった庵崎は、時代を経るに従い具体的な地域として秋葉権現付近一帯の呼名となっていたようである。鳥文斎栄之筆『隅田川遊楽図巻』には「秋葉社」が東岸の景物のひとつに書きこまれている。また一枚刷の『隅田川独あゆみ』(天保年間か)には秋葉権現の絵の南側に「庵壺」との表示がなされている。

なお『江戸文学地名辞典』⁽¹⁰⁾では、

庵崎さきいお「木母寺の北の方とも、又請地村秋葉権現の辺りなりともいへり」(図会)とあるが、『紫の一本』には、小梅村の出崎で五百崎とも書き、その由来は昔本所が海で、洲が多くあつ

たからこの名をつけたという。また『江戸砂子』は、千代世福荷付近としているが、これは特定の地をさしているのではなく、広くこの辺一帯をいっただのである(墨田区向島二丁目から堤通三丁目一帯)。

と記載している。

2

庵崎は時代を経るにつれて文人墨客や風雅を愛する人士の杖を引くところとなったが、しかし庵崎そのものを対象として作品化した句は意外に少ない。さきに挙げた「隅田川独あゆみ」は「関屋落雁」「潮入夕照」「橋場夜雨」「隅田川秋月」「真乳晴嵐」「洲崎晚鐘」「駒形掃帆」「富士暮雪」の隅田川八景を挿入しているが、これらは勿論のこと、その他隅田川兩岸の名所を題材とした句は枚挙にいとまないほどである。それにもかかわらず庵崎の句を探すのは難かしい。背見によるその作品を年代順に列挙してみたい。

延宝九年(一六六)刊、清風編『おくれ雙六』

初灸

(1)いほ崎や不二の煙の初灸

元禄十二年(一六九)刊、乍単斎等射編『伊達衣』

(2)廬崎もわぶとこたへよ巳みみの被ま

宝永六年(一七三)序、無倫編『紫竹杖』

廬崎摘草

艶士

高桑
吉直

(3) 放れて雉子禿やあさち原
享保十八年(一七三三)刊、貞山編『江戸名所』

庵か崎

(4) 恋無常いつら雪霜庵か崎

上州大間々

柳枝

明和二年(一七六五)刊、図大編『古来庵発句集前集』

一日、庵崎のほとりに遊びて、三谷舟の行かよひも垣ほの間にながめて残暑を通る。これ色即是空眼前たり

(5) 物喰ふて眠らば牛歟秋の蟬

存義

天明七年(一七九七)刊、松露庵編『故人五百題』

(6) 二声は庵崎越えつほととぎす

左明

寛政五年(一七九三)成、碩布編『しら雄句集』

菴崎にて

(7) うすみのや夕越くれば雨かすむ

白雄

文化六年(一八〇〇)板、莊丹著『能静草』

(8) 春雨や橋場菴崎真乳山

莊丹

文化十二年(一八五五)刊、心非等編『風道行』

(9) 五百崎の雨はまことか夜の花

袁丁

文化十五年(一八六〇)序、土由編『美佐古鮎』

(10) 庵崎や草もつくるあまが畑

芙蓉

文政二年(一八二〇)刊、対山編『空華集』

(11) 寝てすむ庵崎の灯や夜もすがら

完来

これら十一句について、庵崎をどのような視点で捉えているかを検討してみたい。(1)は談林調の吟詠で、庵崎からの富士の遠望と、

初灸の煙を對比させておかし味をだしている。(2)は災厄を払う三月上巳の日の行事と庵崎あたりの佻しげな風情が、いかにも似つかわしいというのである。(3)の句を収める『紫竹杖』は、無倫門の倫和・秋浦・桐江が江戸の名所、名物を句題とした発句を諸家に募った選集で、句中の「あさち原」を対岸の橋場にあった繪泉寺門前の原野の呼名「浅茅が原」と解するならば、庵崎がまだ広い範囲を示す称呼とされたころの証左ともなる。(4)の句は庵崎の地が、当時原野の面影を残す野趣に満ちたところであったことを思わせる。(5)は、その前書によって遊興の場としての庵崎を詠んだ句と知れる。句中の牛は古く須崎村にあった牛御前、今の牛島神社境内の撫牛を念頭に置いた発想であろう。(6)の句は、ほととぎすの名所でもあった庵崎を、風雅の境として捉えている。菴門万子の「一声でこゝをしまふか郭公」を連想させる。(7)の句は、雨もよいの夕暮という微妙な時間の移りゆきのころ、薄美濃張りの提灯を下げて庵崎を通り過ぎる姿を、情感をこめて詠んでいる。なお庵崎のカテゴリーである向島の白鬚神社には白雄の代表作として知られる「人恋し灯ともしころをさくらちる」の句碑がある。(8)の句で、橋場と真乳山は隅田川の西岸、庵崎は東岸に位置している。したがって莊丹の句は兩岸にまたがるパノラマ的景観が春雨にけむる情景の眺望句であるが、加藤郁平氏は「河東節の『助六郎の花道』あるいは一中節の『江戸紫』の文句を借りたものだろう。」(『江戸俳諧歳時記』)と評している。加藤氏の言うように実想句ではない歌謡の歌詞によったものとするならば、庵崎が橋場や真乳山と同等に、江戸名所として普遍化

していたともいえよう。(9)の句は庵崎の夜桜に降る春雨の情趣。(10)の句は庵崎の田園的雰囲気の断片をスケッチしたものの。(11)の句は庵崎に夜泊して、涼しさを満喫した風流人としてあることの満足感である。

このように個々の句について検討してきたのであるが、総じていえるのは、これらの俳人たちは一様に庵崎の地をおのれの俳諧の舞台としてふさわしい、風趣に満ちた空間として認識していたということである。

また天明五年(一七五五)刊、几童編『続一夜松前集』に収める「於深川臨水亭興行」歌仙に、

そろ／＼と断和らぐ月の客

壱の声寒きいほ崎の秋

天府 完来

と庵崎の月見の情景を詠んだ付合がある。

さらに俳諧とは別であるが、庵崎に触れた資料として元禄十六年(一七〇〇)刊、『松の葉』(第二卷・十七・手枕)に、

昔の人の忍ばれて、袖に涙は夜の雨、草のゆふ崎分けて来し、
隅田川原の荒れたる宿に、水鶏ならでは扉をたたく、人はあら
じな待宵に、枕な投げそ、なげそ枕に咎もなや、

とある。「ゆふ崎」は木綿を庵崎に掛けていている。ここでは「草のゆふ崎分けて来し」と庵崎を草深い原野として、イメージ化している。

3

庵崎とより深くかかわった俳人に祇空・綾足・一茶がいた。このうちもっとも関係の深かったのは祇空といえよう。祇空は正徳元年(一七二一)、この地に有無庵を結び閑を養った。

享保二十年(一七三三)刊、祇徳編『誹諧句選』に、

庵崎の有無庵をしつらひし時へ鶴

身のほどを見るや冬菜の青しとど

祇空

の句がある。冬菜を啄む青鴨に托して結庵時の心境を吐露している。有無庵での起臥は六年間に及んだが、やがてここを離れることとなる。その際の心情は、享保十八年刊、水光編『去来今』に、

本のしづく

六とせ住なれし月影のさすや庵崎の有無庵も、さはる事ありて引こぼち、雑具竹樹やうのもの小舟一そうにのせ、この川むかひにかゝるしるべある橋場と云所へうつしぬ。

と述べられている。東岸の庵を引き払って西岸の橋場に移ったわけである。なお原頭注に「六とせ住なれしときこえし有無庵のあと、弘福寺のまへ、今は田家となりて其あととさだかならず。菩提庵・八千庵などゝもきこえしころあり。」とあるが、これによって有無庵は牛頭山弘福寺(墨田区向島五丁目)の門前近くであったと知れる。

享保十八年四月、箱根石霜庵において七十二歳で歿した祇空の遺

句集である戸外編『くち葉』下巻（刊年未詳）から、庵崎時代を題材にした句を拾うと、

秋

九月十三日 東武にかへり庵崎に帰庵

状箱のふた夜の月を工合かな

園女蔽牛庵崎を訪し時

十日過て醬油をとす黄菊にも

庵崎曉起

なにもものゝ立りとおもへば靑靄

庵崎有無庵にて専吟昨非とかたる

朋の字やなゝめにかたる月の肩

庵崎の庵をしつらひし時

身の程を見るや冬菜の青鴨（前出・誹諧句選）

冬

有無庵にて

近所には炭竈なくて住居かな

同病中の時

犬もはや医者をとがめず力草

有無庵にて

煤無音餅無事にして珍重也

『くち葉』は下巻のみの零本であり、秋と冬の句を収めるにすぎない。しかし、この八句からも、市中の喧噪から身を遠ざけ、俗事に心をなやますこととてなく、月を愛で、時には俳友の来訪を得て

風雅を語り合う有無庵での動静の一端は、窺い知ることができる。

こうした祇空の日常を知友の視点から描いた句文が、正徳四年

（七三）刊、祇空編『みかへり松』に収録されている。

清流洞祇空と変名して、庵崎に一字有。団に香炉、凡はあるに

まかせ、花・ほととぎす・月・雪に富て、詩あり、誹あり、客

に俗なし。たゞたらざる物ひとつをいはど、

世のうさを知らぬ無休か髭の雪

仙鶴

祇空子、ことし庵崎の有無庵にかへりすむ。その庵のさま、一

石を繩床とし、数竿の竹を友とす。安眠高臥、白鷗の江南にあ

さるがごとし。噫たれかこれを羨ざらむ。

鶴にまかせ斧をともし居土頭布

園女

仙鶴と園女の筆は、簡素なしつらいの庵ではあるものの、自在な

心で四季それぞれの景趣を賞翫し、雅友との風交を楽しむ、まさに

風流三昧の境地に浸る祇空に羨望の眼を注いでいる。

本稿の冒頭に綾足の『草のいほり』を引き、表著なる俳人が五百

崎を居住の地としていたということに触れたが、その綾足も宝曆十

一年（七六）刊の『はしの名』で、

年のいそぎにとりまじえて、雪かきたれ降ける日、五百崎のわ

たりちかく行ことのありしに、此御神に詣ふでて

白髭の海老も木の間に年の雪

庵主

と五百崎の地名を挙げている。雪の降る歳末の一日、所用のため五

百崎のあたりに出かけ、そのついでに白髭明神に参詣したとする。

「此御神」は上五の「白髭」から隅田堤の下にあった寺島村の鎮守白髭神社の謂と知れ、白髭の森とも称された名勝の地であった。

のち綾足は『紀行三千里』の一陽井素外の「題辭」に「書肆醉知棺を庵崎に輓し、夕烟立かへらざるを悔む。」とあるように、有無庵の旧跡に近い牛頭山弘福寺に葬られた。いま境内に綾足自画像歌碑が建つ。

宝曆十一年の春、秩父大宮の綾足の門人未了と為谷は五日間にわたる江戸遊興の旅をしたが、その折の句日記『その日がへり』に、

秋葉

あらたなる地なれど、人のあまたまふで来る所なれば、まだ咲ぬ木陰によりゐて、酒のむなど多し。われくも休らふ。

との一節がある。浅草観音の参詣をすませたのち、「船かりて、すみだ川にのぼる。」「三めぐりより牛頭山にいたる。」との順路で秋葉に到着している。「秋葉」の記述は秋葉権現の付近が新しい行業地として人気を得ていたことを裏付けている。「まだ咲ぬ木陰によりゐて、酒のむなど多し。」からは、いつの時代にも共通する庶民感覚が伝わってくる。

一茶と庵崎の接点の特色は、庵崎の句を多く詠んでいるという、そのみに尽きる。まず前書のある句を挙げると、

心を転じて、浅草真土山に登る。爰に隠れ家茂睡が石有。かれあく迄閑に住なしたらんハ、歌のさまにしられて昔したはしく

庵崎や古きゆふべを春の雨

が「花見の記」にある。この一句には元禄十年、戸田茂睡の建立し

た「あはれとは夕越えて行く人も見よまつちの山にのこすことのは」の歌碑を仰ぎ、この辺りに閑居したという茂睡を偲ぶ気持を込めている。「花見の記」は文化五年（二〇〇）三月二十日、随齋らと上野から浅草周辺を散策した折の句文であるが、一茶は隅田西岸の待乳山の一带も庵崎と認識していたようだ。

閏二月廿九日といふ日、雨漸をこたりたれば、朝とく「頭」陀袋首にかけて足やいて角田堤にかゝる。すでに東はほのくしらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに近々ならせ給ふにや、川の方幽に天地丸赤々とたゞよひ、田中は新に道を作り、溝川ことく板をわたして、おのく御遊をまつと見へたり。まことに心なき草木も風に伏して、日出度御代をあふぐとも覚へ侍る。

五百崎や御舟をがんで帰る雁

この句は文化八年（二六二）閏二月二十九日、当時柳橋に住んでいた一茶が、下総流山に赴く途次、將軍家斉の御遊を待つて隅田川に浮かぶ御用船天地丸を目にした感懐である。したがってこの場合の五百崎は隅田川沿いの地帯を指しているとみられる。

以下、制作年次を追って庵崎の句を並べてみよう。

庵崎や古き夕を雉の鳴

文化六年

五十崎遊茶店

春雨や盃見せて狐よぶ

文化七年

庵崎の犬と仲よいちどり哉

文化八年

五百崎や雉を鳴かす明俵

文化十二年

庵崎や亀の子こ筑になく蛙

文政元年

五百崎や鍋の中迄ま雁おりる

〃

五百崎や雉子この出でて行炭俵

〃

五百崎や庇の上になく蛙

文政七年

五百崎や鍋の中ちでも鳴千鳥

〃

五百崎や雉の顔出ですあき俵

自筆句集

同類句の多いのは一茶の特徴であり、前書を付す二句を加えた右の計十二句にもその傾向がみられるが、それにしても一茶は庵崎を隅田の川岸に広がる江戸近郊の、風趣を誘う田園地帯と捉えていたようだ。そこは雉子や千鳥と人間とがごく自然に共存しているような空間で、そのハーモニーが醸し出す情趣に詩的感興を誘発されたとはいえないだろうか。

庵崎をそうした思いで受けとめたのはひとり一茶ばかりではなかった。祇空もまた然りであったし、二章で取りあげた諸俳人たちにも庵崎を景観に富む風雅の地とする共通した認識が内包されていたと思われる。しかし、その一方、名所記類、とりわけ『江戸名所図会』の記述にあるように、秋葉権現周辺の歓楽地としての機能が、庵崎の名を高からしめたのもまた事実であった。一茶の「五十崎茶店」と前書した句も、その傍証の一端とみてよい。

要約するならば、庵崎は行楽地としての狭義な空間の呼称と、隅田河岸に広がる名所・旧跡を包みこんだ田園地帯をいう広義の呼称との両義性を包括した地域であったと考えられる。そして都会趣味の戯作者や狂歌師は狭義の庵崎に愛着を感じ、四季の推移や景観に

心を寄せる俳人たちは広義の庵崎を憧憬したともいえよう。

注

- (1) 浅井了意著。京都河野道清刊。角川書店刊『日本名所風俗図会』(3)所収。
- (2) 辻雪洞著。序によれば享保四年成。江戸市中の諸侯の第宅、寺社、名勝を巡覽して書き留めたもの。『新燕石十種』所収。
- (3) 加藤敬豊著。享保十八年成。江戸本所の名所旧蹟の由来、隅田川に関する記事を記す。『新燕石十種』所収。
- (4) 琢玉齋著。須原屋茂兵衛・同伊八の奥付。刊年なし。『日本名所風俗図会』(3)所収。
- (5) 百花園藏板。岸本由豆流、大窪侍伝の序がある。隅田川兩岸の名所・名物・古跡等を略述したもの。翠溪筆の兩岸風景画を添える。
- (6) 七卷二十冊のうち天保五年十冊、同七年十冊刊。斎藤長秋・同莞齋・同月峯著。江戸須原屋茂兵衛ら刊。『日本名所風俗図会』(4)所収。
- (7)(8)(9) 『江戸から東京へ』(6)向島・深川(上)。(初出は大正九年六月十日から同十二年九月一日まで報知新聞朝刊連載)。昭和五十年八月刊、中公文庫。
- (10) 浜田義一郎監修。粕谷宏紀執筆の項、昭和四十八年八月刊、東京堂。
- (11) 旁を欠く。碑かとも。

(成城大学短期大学部教授)